



私達の地球を少し冷やそう

第31回

「環境問題は命の問題です」 国連職員・大賀さんの危機感

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 平野 喬

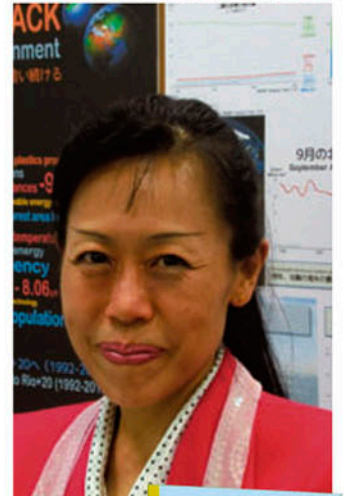
「リオ+20」という活字を最近目にしませんでしたか。「リオ、プラス、にじゅう」とでも読めばいいのですが、6月20日からブラジルのリオデジャネイロで開かれた「国連持続可能な開発会議」の略称です。

今から20年前の1992年6月、同地では「国連環境開発会議」が開かれましたので、それから「20」年たったという思いを込めたネーミングです。20歳以下の人たちはまだ生まれていなかった時の国際会議ですから、今回は世界中で地球環境保全への熱意が低調に見えたのはやむを得なかったのかもしれない。

20年前の会議は「地球サミット」と呼ばれ、各国の国家元首らが集まり、20世紀最初で最後の大規模な国際会議と位置づけられました。「環境破壊の20世紀」から、21世紀を「環境の世紀」にしようという希望に溢れた会議でしたから、NGOや経済関係者など4万人以上も集まりました。また、東西冷戦の終結で、それまで使われていた軍事費の多くが、「平和の配当」として地球環境の保全に使われると期待されました。地球温暖化防止、生物多様性の保全、砂漠化防止の3条約が成立し、環境の世紀に向けて世界が一つにまとまったと思えました。

さて、それから20年たって、私たちの地球はどうなったのでしょうか。様々な検証作業が進められていますが、ケニアのナイロビにある国連環境計画(UNEP)

リオ会議のPRのために来日し、「環境は命の問題」と訴える大賀さん



で国際交渉の調整官を勤めている大賀敏子さんにお話を伺う機会がありました。

大賀さんは1983年に一橋大学を卒業して、初のキャリア女性として環境庁(当時)に入った方です。英語が堪能だったので、新人の時から、竹下、海部総理らの出席する環境国際会議で翻訳やコピー取りなど裏方の仕事を通して世界を垣間見たそうです。1999年からはUNEPの正規職員になっています。その大賀さんが、「日本人の知らない環境問題」(ソフトバンク新書)と題する本を出版し、6月の初めに講演会、トークショーを行うために来日しました。

厳しい現実が伝わらない

大賀さんの本は、ピーターという黒人青年の話から始まります。UNEPで運転手として働いており年齢は25歳くらい。両親は若くして死んだ。ピーターは13歳の時に牛飼いの仕事にありついた。隣国のソマリアから大勢の難民が押し寄せ、飢えと病気に苦しんでいる。雇い主の厚意で自動車の運転免許をとったので、自



分は運転手として働けるので幸運だと思う。そして、ピーターは環境問題の国際会議に集まった各国の代表が、レストランでご馳走をほおぶるのを目にしてしまう。

「環境問題は命の問題なんです。日本人の考え方が違って、環境問題は開発問題、貧困問題なんです」と大賀さん。同僚のピーターの話は、その強烈な現実を伝えるためだ。私見ですと断りながら「ほんとは、あれこれ、会議なんて開いている場合じゃないんだけどね」とその緊急性を訴えるのは、国際会議を裏方で支える国連職員として、厳しい現実がなかなか国際社会に通じない、特に日本に伝わらないもどかしさを痛感しているからかもしれない。

「リオ+20」は、環境と経済成長を両立させる「グリーン経済」へ、世界の国々がどのようにして移行するかがテーマでした。環境意識の高い日本人、優れた環境技術のある日本企業にとって、自らの復興と世界に貢献するチャンスだと大賀さんは強調していました。

財団法人 地球・人間環境フォーラム
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。